

Sukenari Iwamoto

神学と人文（大阪基督教短期大学紀要）第19集 1979年12月発行 抜刷

「1784年の按手礼」をめぐって

岩 本 助 成

「1784年の按手礼」をめぐって

岩 本 助 成

1. 「1784年の按手礼」

いわゆる「1784年の按手礼」(The 1784 Ordination)とは、ジョン・ウェスレーが1784年9月、コーク(Thomas Coke)らに行なった按手礼のことである。この按手礼は、単なる一儀式としては見過ごせない歴史的意義をもっている。その背景や状況を考察しつつ、ウェスレーの教職制や聖務(ミニストリー)に対する考え方を論じようというのが、小論の目的である。

(1) コーク(1747-1814)という人物

トマス・コークは、1747年9月9日、ウェールズの Brecon で生まれた。オックスフォードの Jesus College に学んだ。1768年に B. A. を、1770年に M. A. を、更に1775年には Doctor of Civil Law を得ている。彼は聖職者への道を選び、1770年、国教会執事(deacon)として、1772年には司祭(priest)として按手礼をうけている。1776年8月13日、当時29才であった彼がウェスレーと出会う。翌年には熱心なメソジストの一員となっていた。1782年には、ウェスレーによってアイルランドに派遣されるほどの信望を得、そのよい助け手となった。「メソジスト海外宣教の父」と呼ばれるにふさわしい働きをもって、その生涯を福音宣教にささげたのである。

1784年2月、ウェスレーはコークを、ロンドン、シティロードチャペルの書齋に招いた。そこでは、その前年、パリ条約によって独立の承認を

得たばかりのアメリカにいるメソジストの群れのことが真剣に話し合われた。ここで独立革命期のアメリカにおけるメソジスト運動のことに触れておきたい。

(2) 独立革命期におけるメソジスト運動

第1次信仰復興運動とか、大覚醒運動 (the Great Awakening) と呼ばれている運動は、1720年代から70年代後半の革命期にかけて、当時のアメリカ全植民地に開花し、衰退していた宗教状況を一変せしめた。リッテル (F. H. Littell) やミード (S. E. Mead) もこの運動を高く評価し、これがアメリカ独立革命を成功させた一要因であると認めている。⁽¹⁾ 植民地におけるメソジスト運動は、主としてニューヨークのアイランド移民やメリーランドの農業移民の間に広がった。それは信仰復興運動の進展とともに、南部 (イギリス国教会) 植民地でますますその勢いを得た。15,000人を数えていた信徒は、70年代に急速に伸び、1784年の組織化を経てウェスレーの没年 (1791年) には43,265名の会員を数えるにいたった。(因に、イギリスでのメソジスト人口は、1767年に25,911人、ウェスレー没後で75,000人ほどだとされている。)⁽²⁾ 上述の信徒に対し、巡回信徒伝道者は83名、地域定住の信徒伝道者は数百名にのぼっていた。その中心的指導者はフランシス・アズベリー (Francis Asbury, 1745—1816) であった。彼は1771年に渡米した。しかも独立革命期もふもとどまった派遣信徒伝道者として、唯一の存在であったというのである。後年、彼は「メイン州からメキシコ湾にいたる地方を旅行し、西はミシシッピーまで行き、約三千人の説教者に按手し、その勇猛果敢な生涯を終えるまでには約一万七千回の説教をしていた」といわれている。⁽³⁾ (なお、地域定住の信徒伝道士のことを、英国では local preacher, 米国では lay preacher と呼んだ。) しかし彼らは皆、信徒伝道者なので伝道旅行には励むが聖礼典を執行できない。初期の北米メソジストたちは、信徒伝道者による聖餐執行の禁止と、国教会の礼拝への出席励行を定めていたからである。加えて独立革命期に、

イギリス国教会の「王党派」の多くの聖職者が植民地を去っていった。独立後も、メソジスト運動に協力する国教会聖職者は皆無であった。ただ、国教会聖職者によるメソジスト伝道者への接手の拒否は、教会的なものではなく、政治的なものであった。

周知の通り、ウェスレーは彼の信仰復興運動を礼拝改革運動としても推進した。生涯を貫いて聖餐を高調した。しかしこのようなウェスレーの指導を実行することは、北米においては不可能に近いという状況が現出したのである。ある教会員は5年間も陪餐できなかった。信徒伝道者の間に、聖餐執行を行なうものが現われはじめた。分裂の危険や、教会秩序の混乱による分派化の危険も生じていた。「われらの牧師の手から陪餐せしめよ」とのメソジストの願いも又、自然の願望というほかはない。熱心な宣教活動を、秩序のある教会形成において行なわせようとするウェスレーの牧会指導は、このように緊迫した状況のもとですこぶる困難の度合を増していった。

生涯、国教会の主教制を尊重したウェスレーは、アメリカをその教区とするロンドン教区の主教に、再三、派遣宣教師への接手を乞うて拒否されている。⁴⁾「今や非常事態が到来した！」——これこそ、当時のウェスレーの心境ではなかったろうか。われわれは、コークの接手礼とアメリカへの派遣が、このような非常事態のもとで行なわれたことを、決して忘れてはならない。だが、問題は「非常事態であったから」という説明だけに収まりきれない。この点に関しては後述することとして、話を1784年2月のウェスレー・コーク会談へと戻そう。

Samuel Drew がコークより伝聞したとする話に基づけば、(残念ながらことに、同年、リーズで開かれた年会の記録は、この件にふれていない) ウェスレーは司祭コークが後述するような理由によって接手の権限を持つのであるから、そのまま至急に北米へ赴くことを求めたらしい。しかし F. Baker の研究にも詳しい通り、コークと北米メソジストの中心的信徒伝道者アズベリーとの関係は、実に微妙なものである。⁶⁾ はたしてこの老練

な信徒伝道者は、ウェスレーからの何らの権限付与をもたないコークを監督として受け入れるだろうか。コークもこの点を危惧していた。結局、ウェスレーの「按手礼」をうけて、コークはアメリカにおけるメソジスト教会を監督するために派遣されることとなった。同じ受接者、ホワットコート (Richard Whatcoat) とヴァセィ (Thomas Vasey) も補助者として同行させ、教職制の確立を伴う宣教の教会の形成を努めさせることとした。

(3) コークの按手礼

1784年9月1日、ウェスレーは日記にこう記している。“Being now clear in my own mind, I took a step which I had long weighed in my mind, and appointed Mr. Whatcoat and Mr. Vasey to go and serve the desolate sheep in America.”⁽⁶⁾ 米国メソジストの混乱と分裂の危機をのりこえ、宣教と礼拝のよき指導を与えねばならないということが、「ひさしく心の重荷となっていた一件」だったのであろう。ホワットコートとヴァセィとの執事への按手礼は、ウェスレーと同じく国教会の司祭であったコークとクレイトンの陪席のもとに行なわれた。9月1日、朝5時、プリストルの私宅での按手礼であった。翌2日、ウェスレーは彼らを長老（司祭）として按手し、同時に、コークを「監督」(Superintendent)として按手した。

私的な日誌の9月2日の項には、次のように記されている。“Prayed, ordained Dr. Coke as a Superintendent, by the imposition of hands and prayer (being assisted by other ordained ministers).”だが、日誌を伴って公刊された日記では、なぜか“ordained”なる語は省かれている。⁽⁷⁾

コーク一行は9月18日、早くもプリストルを出帆し、困難な航海のすえ、11月3日、ニューヨークに上陸した。彼らは3つの文書を携えていた。第1は「証明書」(certificate)である。ウェスレーは「私は今日、

(他の受按聖職者の陪席のもとに) 国教会司祭, 法学博士トマス・コーク氏を, 按手と祈りともって監督 (a Superintendent) として聖別した (have set apart)」と記している。ordained や consecrated なる語は避けている。第2は, 1784年9月10日付の, 「北米の兄弟たちへ」という書簡である。コークを派遣する理由を述べたあとで, ウェスレーはコークとアズベリーとを, 北米メソジストの連帯責任を負う共同の監督 (Joint Superintendents) として派遣する旨を伝えている。又, ホワットコートとヴァセィとは Liturgy のために派遣すると述べられている。第3の文書は礼文書である。 The Sunday Service of the Methodists in North America. With other Occasional Services と題され, 1662年の公同祈禱書を少し改変したものである。

さて, 11月14日には, デラウェアにおいてコーク・アズベリー会談が開かれた。12月25日から3日間, バルティモアで開かれた会議は Christmas Conference と呼ばれている。アズベリーはこの3日間に, コークによって執事, 長老, 監督へと按手されていく。しかし, くだって1787年の Discipline (教憲) において, 彼らが「主教 (bishop)」を自称したことが晩年のウェスレーの激怒を買う。その後の北米メソジスト監督教会の歩みは, 他の研究に詳しい。⁴⁹⁾

2. 「1784年の按手礼」の解釈をめぐって

ウェスレーがコークらに対して行なった按手礼の解釈は, 大体, 4つの流れに分類される。では, それぞれの解釈を検討してみよう。

第1の解釈は, この按手礼が合法的なものであったか否かを論じるタイプのものである。ギリシア正教会の立場からの Tsoumas はこの按手礼の無効を宣告する。⁴⁹⁾ Urlin などの意見も同じ傾向をもつ。この解釈の難点は, 以下において論じるようにこの問題の所在は広く深いので, 有効か無効かという論法では解決し切れないところにある。更に合法か非合法かを論じ合ったとして, この点についての国教会規定の基本となる the Canon

Law of the English Church の適用解釈は、当時まだ確立していなかったことが挙げられねばならない。事実、ウェスレー兄弟の間に、すでにこの点に関する「執行規程」(rubrics)をめぐって解釈上の対立があった。それほどに、確実な解釈は困難であったことを示している。いずれにせよわれわれとしては、第1の解釈の線を進んで物事を決する訳にはいかない。

Piette 神父らは第2の解釈をとる。⁽¹⁰⁾ ウェスレーが緊急な状況を前にして性急な判断をくださったことによる、偶然の過誤という見方である。この説はウェスレーを弁護しているようではあるが、ウェスレー自身の考えと言動との間に多くの錯誤をうむ解釈であって、これに従う訳にはいかない。

第3の解釈もウェスレーに同情的な見方を打ち出している。彼はそれを「聖別や祝福による派遣」のつもりで行なったのだが、コークたちや北米のメソジストによって「按手礼」と誤解されてしまったのだと解釈する。Lawson らはこの線上を進む。⁽¹¹⁾ ウェスレーが「按手」という語の使用に慎重であったことは既に述べた通りである。しかし同時に、彼はもっとも私的な「日誌」でこの語を用いていることも事実である。そればかりではなく、後述するような40年にわたる熟慮の期間と、その後の彼の行動とを考え合わせると、われわれはこの同情論に大きな限界を見出さざるを得ないのである。

そこで、最近の A. Raymond George などに代表される第4の解釈に注目したい。⁽¹²⁾ ウェスレーが北米の非常事態に対応してコークらの按手礼を執行したことは事実だが、同時に、ウェスレー自身の考えの中に注意すべき変遷があったことを主張するのである。国教会の忠実な子としてのウェスレーの態度を正当化する試みだけでは、どうにもならない何かが存在するのは事実である。この解釈がその点に注目させたことを評価しなければならない。しかし、その「何か」とは一体、どのような内容をもっていったのか。筆者はそれを、ウェスレーにおける教職制理解の変遷と、信徒

論理解の変遷という2点から跡付けてみたい。

(1) ウェスレーにおける教職制理解の変遷

ウェスレーの初期の教職制観や聖務観は、国教会内で高教会派と呼ばれていた流れにおけるそれであった。Holy Club でメソジストとかサクラメントリアンとか綽名された彼や仲間の言動を想起するとよい。1735年—39年のジョージア伝道での態度もそのことを裏づける。その後、モラヴィア派を敬愛しつつ、同時に、彼らを受け容れかねた理由の1つは、彼らが使徒継承による主教から受洗していないこと、又、按手されなかったことによる。ウェスレーの国教会主教制擁護の立場は強かった。

さて、問題の按手礼から40年近く前になる1746年1月20日、ウェスレーは、Baron Peter King の「原始教会の制度、訓練、一致、礼拝」(An Inquiry into the Constitutions, Discipline, Unity and Worship of the Primitive Church, London, 1691.) なる書物と出会う。⁽⁴³⁾ キングの著書はウェスレーに、原始教会においては、主教と司祭(長老)とは同じ職位にあったのであり、従って司祭も按手の権能を有するとの見方を提示した。司祭は職能上、主教と異なっていた。しかしそれは決して職位上のことではなかった。職制上、司祭は主教の聖務を執行する権限を有するが、實際上、主教の許可なしにそれを行使しなかったのだとキングは力説した。

続いて彼は Edward Stillingfleet の「イレニクム」(Irenicum, 和平の提議)を読んだ。⁽⁴⁴⁾ スティリングフリートは、主イエスも使徒たちも教会に特定の教会政治形態を与えなかったと論じた。主教制を擁護するため、それが聖書によって定められた唯一の制度であるかの如く主張されてはならないと言うのである。彼は又、司祭が必要に応じて主教の職能をも行使していたと述べた。もしこの書の主張が原始教会の真実な姿であったとすれば、今こそ北米における切迫した状況を前にして、ウェスレーは必要に応じて主教の職能を行使してよいこととなる。

事実に照らしてみると、ウェスレーはこれらの著作にとびつき、我田引水流にその結論を自らの言動に結びつけたのではなかった。たとえば、それから10年も経った1756年7月3日付のクラーク師への手紙においても、ウェスレーはなお、使徒継承を聖書によって立証されるものと信じて述べている。⁽¹⁵⁾

もう1つ、ウェスレーは、古代アレクサンドリア教会の教職制や聖務の模範にも学んだ。同教会は主教座が空位となったとき、他教会から主教を招かないで、自教会の司祭から主教を選出し、司祭たちの按手によってその人物を主教としたという。とすれば、この偉大な古代教会も司祭が主教按手の権限を有するという好例を示しているではないか。ただし、ウェスレーは次の点に留意する。即ち、英国においては現在、主教座は空位ではない。従ってメソジストはあくまでも国教会のみをチャーチとし、その教職制と聖務を守ればよい。自分たちのソサエティ集会はチャーチでなく、チャペルであると。しかし北米のメソジストの状況はこれと全く異なる。今やそこでは主教座のみならず、教職制が崩れて秩序なき分派化が起ろうとしている。古い秩序を固守してこの緊急事態に対応しないならば、主イエスの至上命令としての宣教の任務を果たさなかったことになるのではないか。ウェスレーはここで、秩序を重んじつつも形態の多様性を示していた古代教会に大きく学ぶこととなる。

キングに学んだ時からコークの按手礼までの40年間、ウェスレーの考えは微妙な変化を示している。第1に、彼は現行の秩序を最大限に重んじようと努める。信徒伝道者、Thomas Maxfield を Londonderry 教区主教による按手礼のために推した事実があり、既述の通り、北米への宣教師の按手も先ず主教に乞うている。次に、国教会主教からの按手を拒否されると、彼は別の方法を講じる。たとえば、彼がギリシア正教会司教と信じていたエラスムスなる人物から John Jones のための按手礼を得ている。⁽¹⁶⁾ しかしこれも、ウェスレーの許しを得ず、勝手に受按する者が出てくるに及んで断念せざるを得なくなる。

ウェスレーの理解において画期的なものとして、F. Baker や A. Raymond George は、ウェスレーの次の文章を指摘する。⁽¹⁷⁾

「私は自らを英国及びヨーロッパに存在する他のいかなる人物にもひとしい聖書的エписコポス (a Scriptural ἐπίσκοπος) であると確信している。なぜなら中断せずに継続された継承など、誰も経験せず立証できない作り話であることを知っているからである。」⁽¹⁸⁾

もう1つの文章は“Ordination is separation.” という Lord Mansfield の警告に立ち、コークへの反感も手伝って、ジョンを激しく批判する弟チャールズへの返答の一部である。「私は自らがカンタベリーの大主教にもひとしい、れっきとしたキリスト教会の主教であると認識している。」⁽¹⁹⁾ これらをウェスレーの誇張や名誉欲などと片付けてしまってはならない。筆者は読者の注意を、次の2点において促しておきたい。

第1点は、ウェスレーのうちに、自分は全世界のメソジストに対する聖書的エписコポスとして神から派遣されているのだという確信が日々深まっていたということである。終生、国教会を敬愛し、歴史的主教制を無視しなかったウェスレーも、「私の弟は、国教会の方をより多く考え、私はメソジストの方をより考えている」と、チャールズとの違いを自覚していた。⁽²⁰⁾ ウェスレーにとって古代教会は、聖書を信仰と生活の規準とした教会、教理と典礼とを尊んだ教会、人々を悔改めとキリスト者生活の成長へと養い育てた教会であった。彼は国教会と離反しない形で、国教会に重なる形で、古代教会の模範に従うもう1つの教会の姿を信じていたのではあるまいか。そしてそのような群れとしてのメソジストに対し、自分は「聖書的エписコポス」であるとの責任を主イエスに対して抱いたのではあるまいか。その任務の重さは、カンタベリー大主教のもつ任務の重さにひとしいものと自覚された。通常の場合、これら2つの教会像は1つに重なって存在し得たし、存在するべきでもあった。しかし、非常の場合、二者択一を迫られたとき、ウェスレーは自分が聖書的エписコポスとしての責任を負うべき存在であることを確信し、その考えを40年間にわたって深

めて行ったのではあるまいか。

聖書的エписコポスとしてのコークへの按手礼も、陪席の司祭をおくなどして秩序を重視する面をのぞかせている。1785年、ウェスレーは又もや弟の反対を押し切って、スコットランドへの宣教師の按手礼を行なう。ただ、この場合も、慎重な配慮が行なわれている。即ち、彼らの権限は宣教地のみに限定されており、英国には適用されないのであった。英国においては国内法と国教会の規定の適用をうけるからである。

1788年のメザー (Mather) の受按は、この制限の破棄であった。英国のために、監督として按手されたからである。ウェスレーのメソジスト運動への傾斜は、更に深まったと見てよい。その後の状況は、他著による詳述にゆずらねばならない。⁽²¹⁾

第2の点は、この聖書的「エписコポス」なる語を、「主教 (bishop)」と訳すべきか、「監督 (superintendent)」と訳すべきかということに関してである。コークとアズベリーへの指示と、その後、彼らが bishop を称したときの反発に見られるように、ウェスレーは確実に後者を選んでいった。それは国教会の歴史的な主教への背反を避けたという消極的理由によらない。F. Baker は、ウェスレーは「監督 (superintendent)」という語がアウグスティヌス以来の各教父に愛用され、国教会でもジュール (Jewel) が Apology において好んで用いた語であることを熟知していたと述べている。⁽²²⁾ それは信徒の群れを牧会指導する監督者という意味で、メソジスト運動の指導者には特にふさわしいと考えられた。更に職位の上下関係でなく (換言すれば、主教の位階についてではなく)、職位の内容、任務、使命を示す語であるゆえに、この語が選ばれたのである。たとえば、ウェスレーはコークら3人を北米に派遣したときも、コーク、アズベリー、メザーらを監督として立てたときにも、彼らは身分的、職制的には、みなひとしく長老であると理解していた。ただ、コーク、アズベリー及びメザーという長老は、メソジストの群れを牧会監督する権威を与えられている長老なのである。そして彼らの具体的な統率は、説教と聖礼典執行のための

教職者按手と、巡回伝道者を各巡回区へ任命する権限などの行使を通じつつ、宣教と牧会のためになされていった。

(2) ウェスレーの信徒論理解の変遷

筆者は、ウェスレーにその起源をもつメソジストの伝統では、キリスト者の祭司性が以下のように理解されていると考える。

(a) 本来、真の祭司とは、主イエス・キリストおひとりである。キリスト者が祭司であるというのは、彼にあずかるゆえである。大祭司なるキリスト・イエスの現臨を信じない教会に、祭司なる信徒が存在する根拠がない。

(b) 祭司のつとめは供儀にあった。唯一の贖いのいけにえは、主イエス・キリストご自身である。彼にあって自らの体をささげるところに礼拝がある。礼拝こそキリスト者の証しである。

(c) 祭司は供儀によってとりなしをした。主の民と世界へのとりなしは、祭司たる全信徒の任務である。キリスト者とは代禱に生きる祭司である。

(d) 祭司のつとめは、宣教と教育にもあった。老若男女を問わぬすべての人に福音を証しする使命がある。メソジストの群れは、この点に中心的使命を見出した。

(e) つまり、祭司は神と人にと「仕えるもの（ディアコノス、ミニスター）」である。王なる祭司が、同時に、仕え人なのである。

ウェスレーは、以上のように全信徒祭司性なる根本原理を正しく把握し、それを彼の時代と教会と宣教の野において実践した。メソジスト運動は、全信徒祭司運動として把えられなければならない。従ってウェスレーが信徒をよく用いたとか、組織づくりの天才であったとの見方は皮相なものにとどまってしまう。更に以下の諸点は彼の信徒論を跡付けるうえで大切なものであろう。

(a) ウェスレーは、教会が説教と聖礼典とで存立するものとしたが、広

義の説教というつとめは、信徒も大いに担うべきだという考えをもつに至った。最初、彼はいかなる形においても信徒の説教を禁じる立場をとった。しかし母スザンナの戒めを受けた。彼女は先入見なしに先ず彼らにきくべきこと、そして結果として神のみ栄えがあらわされ、教会形成の業が進むか否かまでを、虚心坦懐に見守るべきことを勧めた。

ただ、国教会の伝統に従って、みことばを宣べ伝える聖務と聖礼典執行の聖務とを区別した彼は、メソジストの急速な進展に付随しておこった1つの混乱、即ち、信徒による聖餐執行には生涯はげしく反対した。彼は教会が預言者的使命とともに上述の祭司的使命を負っていると自覚したが、祭司的職能にも区別があり、聖職者が聖礼典執行という祭司的職能を果たすことが、メソジストを分派から救う道であると、終生、信じ続けた。⁽²³⁾そしてこの判断は、メソジストを「分派型」とする誤解や評価をくつがえすその後の歴史的発展へとつながっていったのである。

(b) メソジストの群れは、「共同的な形において」その主教制を保持していると主張されている。⁽²⁴⁾具体的には、総会や年会などいわゆる conference の役職に選ばれた人びとによって牧会指導、行政管理、及び監督という機能が担われているのである。しかし彼らは、あくまでも conference の代表者として行動しているのである。⁽²⁵⁾

信徒伝道者の起用も、彼らのはっきりとした組織、即ち年会 (the annual conference) に組み込まれることを意味した。試みの期間の後、Assistants とか Helpers と呼ばれて補助的な任務に用いられた。外国宣教の場合のように、教区という枠を外されたものであった。1746年の年会記録が示すように、信徒伝道者は、神が特命を与えて起用されたメッセンジャーであるとの積極的見解を与えたのは、ウェスレーその人であった。

(c) 説教も聖礼典も、あくまでもキリストをその内容とする。キリストなき講話も教理解説も例話美談も、説教を成立させない。ウェスレーはキリストの現臨が信じられていない聖餐を徹底的に批判した。

(d) 求道グループであった組 (class) も、キリスト者生活における成長

を求めた班 (band) も、単なる交わりの充実とか組織力の強化といった観点から見られるべきではない。信徒をして派遣された世界における証しの生活に専念せしめるための教職者の使命と任務は重要である。

3. 結 論

以上、われわれは「1784年の按手礼」という偶然のできごとともとれる一儀式の背後に、ジョン・ウェスレーを中心とするメソジスト運動の信仰と活動とが存在することを探ってきた。おわりに、塚田理「最近の教会合同運動に見られる歴史的主教制の理解とその神学的考察」なる論文をとりあげて、拙稿を閉じたい。⁶⁹

塚田論文は10年前に記されたもので新しいものではない。当時、懸案とされていた英国聖公会と英国メソジスト教会との合同運動の高まりを背景に論じられたものである。けれどもその論点は決して途絶されることなく、今日もわれわれに新しく呼びかけているものと解したい。

筆者は特に、この論文の結びの部分にある神学的考察に注目したいのである。塚田教授は、考察してきた主教制教会と非主教制教会の合同運動において注目すべきものとして次の諸点をあげている。

(a) 歴史的**主教制**、即、使徒的継承という教義的立場を、「唯一の歴史的**主教制**の神学的解釈」としてはならない。「使徒的信仰と生活における継承」を本質として問わねばならない。

(b) **主教職**は、第1義的に教会の法および機構の事柄と考えられてはならない。主イエスが宣言され、使徒たちに委託された福音宣教を遂行することこそが**主教職**の任務である。制度としての**主教制**は第2義的なものである。さて、更にその任務を要約すれば、牧会的監督、宣教活動における指導、教会の教えの保護、教区会の議長、及び聖職者の按手と派遣である。

(c) **主教制**とは、そのような**主教職**の機能をいかに制度的に行使させるかにかかわる特定の教会政体のことである。非**主教制**教会においても、メ

ソジストの「結合 (Connexion)」のような、主教的諸機能を行行使する「共同的形態」を有しているのである。

(d) 主教制に関する、特定の神学的解釈を定義づけることを否認する。分派主義的解釈を排し、自由な神学的解釈によって教会の全的な交わりと一致を志向させようと試みるのである。

(e) 主教制のもとにある教会の職制は、決して階層的なものでなく、機能的分化——たとえば、「会衆の中にある主教職」、「会衆を代表する主教職」、「長老制における主教制の示唆」——として考えられなければならない。特に、「長老制における 主教制」ということでどんなことが考えられているのだろうか。「それは、一種の合議制、または集団指導制を基本原理にしたリーダーシップの期待である。主教の権威は決して教会の権力機構の頂点に立つところから来るのではなく、聖職信徒から寄せられる信頼と霊的リーダーシップに基くものである」⁽²⁷⁾と述べられている。

(f) キリストの職制は何かという根源的な問いを發しながら、自らがおかれている諸現実の中で、われわれ自身の職務の具体的方法を再発見して行くことによってのみ、真に歴史的な主教制を問うことになる。このように塚田論文は結んでいる。

少し長い要約となったが、筆者はこの論文を一読して驚きに似たものを覚えたのである。それは、塚田論文の背景がメソジストとの合同運動にもあったとはいえ、本小論で考察してきたような歴史的状況におけるウェスレーの考え方が、現代の神学的考察を鋭く先取りしたものであったからである。拙論の論旨をくりかえすことは避けたいが、ウェスレーの教職制や聖務への見方が、塚田論文の示す現代の神学的考察にはっきりと投影されているのではないか。宣教と牧会の危機に遭遇しながら、ウェスレーのうちに結実していった神学的考察とそれに基づく活動とが、現代の問題解決への道筋の、貴重な道しるべとなっている。

かつてウェスレーは“Extraordinary cases do not make void a standing rule.”と記している。⁽²⁸⁾「非常の場合とて、永続的原則を無にするも

のではない」という意味であろうか。ウェスレーには、非常の場合、通常の規則を破っていく宣教的英断があった。しかし同時に、非常事態においてすら、基本的原則はあくまでも原則として守り抜こうとする教会的信仰が確立していた。そして宣教的英断と教会的信仰とがダイナミックな関係をもって交流している。それがウェスレーの神学と宣教活動との魅力ゆたかな内容を形づくっているのである。

〔註〕

- (1) フランクリン H. リッテル, 『アメリカ宗教の歴史的展開——その宗教社会学的構造』, 柳生 望, 山形正男訳, 東京, ヨルダン社, 1974年, 及び, S.E. ミード, 『アメリカの宗教』, 野村文子訳, 東京, 日基教団出版局, 1978年。
- (2) Encyclopedia of World Methodism, vol. 2, (ed. N. B. Harmon), Nashville : The United Methodist Publishing House, 1974, p. 2499.
- (3) リッテル, 前掲書, 59頁。
- (4) Letters, vol. 7, pp. 29—31.
- (5) F. Baker, From Wesley to Asbury: Studies in Early American Methodism, Durham: Duke Univ. Press, 1976.
- (6) Journal, vol. 7, p. 15.
- (7) loc. cit.
- (8) F. Baker, op. cit., D. W. Holter, “Some Changes Related to the Ordained Ministry in the History of American Methodism”, MH, vol. 13, No. 3.
- (9) G. J. Tsoumas, “A Critical Evaluation of John Wesley’s Ordinations from a Greek Orthodox Viewpoint”, Ph. D. dissertation, Boston Univ., 1953, pp. 143—4, 277.
- (10) M. Piette, John Wesley in the Evolution of Protestantism, (ET. by J. B. Howard), N. Y.: Sheed and Ward, 1938, p. 387.
- (11) A. B. Lawson, John Wesley and the Christian Ministry, London: S. P. C. K., p. 143.
- (12) A. Raymond George, “Ordination”, A History of the Methodist Church in Great Britain, vol. 2, (eds. Davies, George, and Gordon Rupp). London: Epworth, 1978, pp. 143—160.
- (13) Journal, vol. 3, p. 232, cf. Letters, vol. 7, p. 238.
- (14) Letters, vol. 4, p. 150.
- (15) Letters, vol. 3, pp. 180—183.

- (16) F. Baker, John Wesley and the Church of England, London: Epworth, 1970, p. 200.
- (17) Ibid., pp. 276—277, George, op. cit., p. 147.
- (18) Letters, vol. 7, p. 284.
- (19) Letters, vol. 7, p. 262.
- (20) W. F. Lofthouse “Charles Wesley”, A History of the Methodist Church in Great Britain, vol. 1, (eds. Davies and Gordon Rupp), p. 126.
- (21) J. C. Bowmer, Pastor and People, London: Epworth, 1975.
- (22) F. Baker, op. cit., p. 270.
- (23) Works, vol. 7, pp. 273—281.
- (24) 『英国国教会とメソジスト教会との対話』(“Conversations between the Church of England and the Methodist Church”) 1963年。
- (25) 同上報告書
- (26) 塚田 理「最近の教会合同運動に見られる 歴史的主教制の理解とその神学的考察」, 『神学の声』, 第16巻, 第1号, 1969年6月, 聖公会神学院, 26頁—39頁。
- (27) 塚田, 前掲書, 38頁。
- (28) Works, vol. 10, p. 193.

参考文献

- N. Curnock (ed.), The Journal of the Rev. John Wesley, A. M., 8 vols., London: Epworth, 1909—1916. (Journal と略す)
- J. Telford (ed.), The Letters of the Rev. John Wesley, A. M., 8 vols., London: Epworth, 1931. (Letters と略す)
- E. H. Sugden (ed.), Wesley's Standard Sermons, 2 vols., London: Epworth, 1921.
- T. Jackson (ed.), The Works of the Rev. John Wesley, M. A., 14 vols., London: Mason, 1829—1831. (Works と略す)
- F. Baker, John Wesley and the Church of England, London: Epworth, 1970.
- _____, From Wesley to Asbury: Studies in Early American Methodism, Durham: Duke Univ. Press, 1976.
- J. C. Bowmer, Pastor and People: A Study of Church and Ministry in Wesleyan Methodism from the Death of John Wesley (1791) to the Death of Jabez Bunting (1858), London: Epworth, 1975.
- A. Raymond George, “Ordination”, A History of the Methodist Church in

- Great Britain (eds. R. Davies, A. Raymond George and Gordon Rupp), vol. 2, London: Epworth, 1978, pp. 143—160.
- R. Kissack, Church or No Church ? : A Study of the development of the concept of Church in British Methodism, London: Epworth, 1964.
- A. B. Lawson, John Wesley and the Christian Ministry: The Sources and Development of His Opinions and Practice, London: S. P. C. K., 1963.
- 野呂芳男『ウェスレーの生涯と神学』, 東京, 日基教団出版局, 1975年。
- E. Nygren, "John Wesley's Interpretation of Christian Ordination", Ph. D. dissertation, New York Univ., 1960.
- E. W. Thompson, Wesley: Apostolic Man, Some Reflections on Wesley's Consecration of Dr. Thomas Coke, London: Epworth, 1957.
- J. A. Vickers, Thomas Coke: Apostle of Methodism, Nashville: Abingdon, 1969
 _____, Thomas Coke and World Methodism, Sussex: W. M. H. S., 1976.
- C. W. Williams, John Wesley's Theology Today, London: Epworth, 1960.
- J. H. Barton, "Thomas Coke and American Methodism, 1784—92", Proceedings of the Wesley Historical Society (PWHS と略す), vol. 34, pt. 5, Mar. 1964, pp. 104—108.
- J. C. Bowmer, "Ordination in Wesleyan Methodism, 1791—1850", PWHS, vol. 39, pt. 5, June, 1974, pp. 121—127 and pt. 6, Oct. 1974, pp. 153—157.
- L. M. Durbin, "The Nature of Ordination in Wesley's View of the Ministry", Methodist History (MH と略す), vol. 9, No. 3, Apr. 1971, pp. 3—20.
- A. Raymond George, "The Sunday Service", PWHS, vol. 40, pt. 4, Feb. 1976, pp. 102—105.
- N. B. Harmon, "John Wesley's Sunday Service and its American Revisions", PWHS, vol. 39, pt. 5, June 1974, pp. 137—144.
- D. W. Holter, "Some Changes Related to the Ordained Ministry in the History of American Hethodism", MH, vol. 13, No. 3, Apr. 1975, pp. 177—194.
- N. K. Hurt, "Dr. Coke and British Methodism", PWHS, vol. 34, pt. 6, June 1964, pp. 129—134.
- W. T. Smith, "Thomas Coke, Preacher", PWHS, vol. 34, pt. 8, Dec. 1964, pp. 177—180.